

第3回国連防災世界会議

パブリックフォーラム/ユニセフシンポジウム

今回で3回目となる国連防災世界会議が3月14日(土)から18日(水)に宮城県仙台市で開催され、国際的な防災戦略について様々な議論がなされました。日本ユニセフ協会は、パブリックフォーラムとして、14日(土)の午後、岩手県、宮城県、福島県の3県のユニセフ協会と共催でシンポジウムを開催し、子どもの視点での復興と防災の取り組みの必要性を訴えました。

「遊び」「居場所」そして「参加」

ユニセフ事業局長エドワード・チャイバンの基調講演ではじまったシンポジウムは、心理社会的ケア、子どもの保護、冒険遊び、まちづくりの各専門家をパネリストに迎え、「遊び」「居場所」そして「参加」をテーマにディスカッションが展開されました。

「五感と身体をフルに使い右脳に直接働きかける『遊び』は、子どもに本来備わっている回復力(レジリエンス)を引き出すためにとても重要」、「身近なおとなが寄り添い、安心感やつながりを感じられる『居場所』があることで回復力はさらに強くなる」、「そのためにはおとなの心を守ることも必要」、「元気を取り戻した子どもの姿は周りのおとなも元気にし、それは地域を回復させる力にもなる」、「東日本大震災直後に子どもたちが積極的に避難所運営に関わった姿があったように、地域に関わっていききたいという子どもを呼び出すためにさまざまな『参加』の機会が必要」などの意見が出されました。

これを裏付けるように、岩手県や宮城県で震災を経験しながら子どもの支援に関わっている方や大槌町の中学生も自らの体験を話してくださいました。会場に集まった約700人の参加者は、みなさんの発表に熱心に聞き入っていました。



エドワード・チャイバン ユニセフ事業局長による基調講演



ユニセフの東日本大震災緊急・復興支援に携わった4人の専門家たちが、各々の視点からその活動を報告

震災の経験を未来につなげる子どもたち

シンポジウムのおわりに、福島県相馬市立飯豊小学校の6年生が、地域の防災意識を高めるために取り組んできた防災学習の取り組みを発表しました。「私たちが発信していこう。災害に強い国、日本!」という言葉で締められた発表は、力強く頼もしいものでした。

シンポジウム会場に隣接する仙台定禅寺ビルでは「ユニセフ@定禅寺ギャラリー」が設置され、震災の記憶を1000年先に伝えるため宮城県女川町の子どもたちが設置を進める「いのちの石碑」の実物大パネルや仙台市七郷小の6年生が考えた「未来の七郷」の模型が展示され、子どもたちが自らの言葉で、活動の報告や未来のふるさとへの想いを語りました。時折冷たい風が吹く2日間でしたが、通りがかりのたくさんの方が足を止め、子どもたちの発表に耳を傾けていました。そしてその横には、手作りの遊び道具を積んだ「プレーカー」が登場し、小さな子どもとお年寄りと一緒に遊ぶ姿もありました。

どんな場所でもどんな時でも必要なこと

世界の自然災害の被害者の半数以上を占めるのは子どもたちです。子どもの心を守り、生きる力を育てる「遊び」「居場所」そして「参加」。これらは自然災害などで一瞬にして日常を奪われた子どもたちが日常を取り戻し、自らの回復力を引き出すために重要な鍵を握ります。またそれは、必ずしも「復興」や「防災」ということだけでなく、国や地域を問わず、どんな場所でもどんな時でも、社会を維持・発展させてゆくために、すなわちレジリエントな(Resilient=迅速でしなやかな回復力のある)社会をつくるために必要な視点ではないでしょうか。震災からの復興を支援する取り組みとして、また、「次」への備えのための取り組みとして、日本ユニセフ協会はこれからも子どもたちための取り組みを続けてまいります。(公財)日本ユニセフ協会



「ユニセフ@定禅寺ギャラリー」で活動発表を行う女川中学校の卒業生たち



福島県相馬市立飯豊小学校の6年生による発表

東日本大震災支援活動

岩手県から2人の報告～震災後のあゆみ～

パネルディスカッションでゲストスピーカーとして発表した、宮古市赤前保育園主任保育士佐々木未緒さんは、当時の園児や母親の様子と、これからは寄り添いとも生きていきたいとお話しされました。また、津波で父親を亡くし、祖父母が行方不明になっている大槌町佐々木陽音君(中1)は、今は人を思いやる気持ちが少しずつ生まれてきたとお話され、「おとう...俺は七福神(踊り)を続けたい」と心境をお話しました。

岩手県ユニセフ協会から、当日30名の役員・ボランティアスタッフ、CAP岩手のみなさんが参加しました。岩手県ユニセフ協会 藤原綾子



“今こそリアスにCAPを広げよう!” 岩手県CAP連携会議

2015年4月19日、宮古市マリナーズDORAでCAP連携会議を開催。CAP(子どもへの暴力防止)ワークショップは、震災以降日本ユニセフ協会とJ-CAPTAの連携事業としてすすめており、震災後にCAPプログラムをすすめるグループCAPリアス(山田町)が立ち上げ、県内ではCAP岩手(盛岡市)とともに活動しています。

J-CAPTA 理事竹之下典祥さん(盛岡大学児童教育学部准教授)、木村里美事務局長、小野道子ユニセフ子どもの保護アドバイザーとCAPリアス、CAP岩手、県ユニセフ協会のメンバーが参加し、交流と今後の取り組みを話し合いました。～沿岸の子どもたちにCAPをプレゼントしよう～



▲親子で参加の小学生

さわやかな風をうけながら

第5回 ユニセフ・ラブウォーク in いわて

5月24日(日)さわやかな青空の下、第5回ユニセフ・ラブウォークinいわてが開催されました。盛岡城跡公園広場に集まった参加者220人、盛岡市ウォーキング協会の藤澤事務局長のコース説明とストレッチ体操、大学生のみなさんのエールを受けて、10kmコースと5kmコースに分かれ中津川遊歩道に向かって元気にスタートしました。

当日は、盛岡市・一関市・久慈市・花巻市・滝沢市、八幡平市・宮古市など7市、矢巾町など3町から参加しました。小学生・中学生・高校生・大学生・専門学校生が60名、フィリピンのグループ21名も参加し、楽しい会話をしながらウォーキングしました。

中津川にかかっている14の橋、秋には鮭も遡上する清流の遊歩道、さわやかな風をうけながらウォーキングを楽しみました。「楽しかった」「はじめて遊歩道を歩いた」「盛岡の良さを認識した」など感想が寄せられました。

全員ゴールし、参加費はユニセフ募金として世界の子どものために使われます。募金額は81,300円でした。ありがとうございました。



▲橋の景観を楽しみ、遊歩道も長蛇の列



▲10kmも無事ゴール!!



▲こども参加賞や完歩賞を渡すボランティアスタッフ

日本ユニセフ協会創立60周年



©日本ユニセフ協会

第二次世界大戦後、日本は荒廃した国土からの再出発と厳しい食料事情のもとで、飢えや栄養失調などの危機にさらされていましたが、日本の学童や妊婦・乳幼児を支援したのがユニセフでした。1949年10月、ユニセフから贈られた脱脂粉乳(スキムミルク)が届きました。主要12都市の保育所(38ヶ所)に全粉乳が、そして全国45都道府県下のモデル校54校に配られることになりました。岩手県は盛岡市立大慈寺小学校でした。その後、脱脂粉乳だけでなく下着・毛布・原綿・ビタミンAなどの支援が届き、当時の恩返しにアジアやアフリカの子どものために誕生したのが日本ユニセフ協会です。日本ユニセフ協会は1955年に設立し、2015年6月9日創立60周年を迎えました。日本のユニセフ国内委員会(36の国と地域)として、世界の民間部門のユニセフ拠出額はトップレベルとなっています。

岩手県で最初の支援校

当時、大慈寺小学校の教員をしており給食指導に当たりました。船便で送られてくる脱脂粉乳は、最初の頃はカチカチに固まっておりノミと槌でたたいてください、すり鉢で細かくすってお湯で溶かして飲ませました。大変な重労働で微粒子のミルクにし、なかなか溶けないので苦労しました。

その後、県教育委員会に移り学校給食の指導にあたりました。東北の小学校で脱脂粉乳を飲んで体中に発疹が出たというので現地に行きました。うるしでかぶれたのを脱脂粉乳を飲みたくなかった理由に話したのです。給食担当者に作り方を教えてもらい鍋に焦げついて焦げ臭いミルクだったのです。作り方を指導し同じミルクと驚かれました。

粉ミルク支援校とそうでない学校の体重・身長などの定期的な測定で、子どもたちの体格は向上し効果がでてきました。今、私たちは恩返しをしなくてはならない。



©日本ユニセフ協会

2005年10月2日 ユニセフのつどい講演抜粋
県ユニセフ協会評議員 及川サチエさん(岩手県退職女性校長会顧問)